月刊公民館　2013 年 1 月号

「地域の親和度を上げる講座が地域の力に」

RE　Learning　秦野玲子

最初にお断りしておきます。これから書くことは、「誰にとっても、誰がやっても『良い講座』」を作る方法ではありません。私が 10 数年間公民館職員・社会教育主事として公民館などの講座を担当した経験と、現在、外部講師として公民館や他の学習機関で学習支援をさせていただいている実践からの関心や領域に限られていますから、いわゆる講座の企画についての網羅的な理論にはなっていません。それでも、いま反省や課題として意識しているうえで考えていることをお伝えすることで、皆さんが今後事業を企画していくうえでの手がかりのひとつになれば嬉しく思います。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

学習機会が様々な主体により多様なチャンネルが用意されるようになりました。それはとても素敵なことです。公民館が地域の学習機会を一手に担わなければならず、万能ではない公民館は不要だと勘違いされた時が終わったから。

では、公民館で開催する講座は、どの部分を担ったら良いのでしょう。私は、「学びや活動をとおして、地域の方たちが仲良くなる」「地域の中で自分がやりたいことを見つけて実践する」「困りごとを解決するために、かつての『暗黙のルール』に代わる『自分たちに合ったルール』を話し合いによって作る」そのような学習機会をつくり、地域の方たちの幸せを増やす（「幸せじゃないこと」を減らす）お手伝いができることだと思います。

ここまでで気づいた方、いらっしゃいますね。そうです。公民館が創案されたときに、公民館で行われる公民教育について述べられていたことを、表現を変えて書いただけです。

「そんな 60 年以上前のことを持ち出して、いま、どうすればよいかを知りたいのに」と思うかもしれませんね、まあ、もう少しお付き合いください。

現在、まちおこしの様々なアイディアや実践、政治や原発のこと、子どもにまつわる様々な問題などについて、自分たちで考え、学び、発信し、自分たちの平和であたり前の日常を維持するために社会のしくみに参画しよう、と真剣に考えるおとなが動き始めているのは、戦後に民主主義を学び、郷土復興のために自分たちに必要な学びや手段を見つけ、地域の課題に取り組んでいた学習活動と重なることがたくさんあるのではないでしょうか。

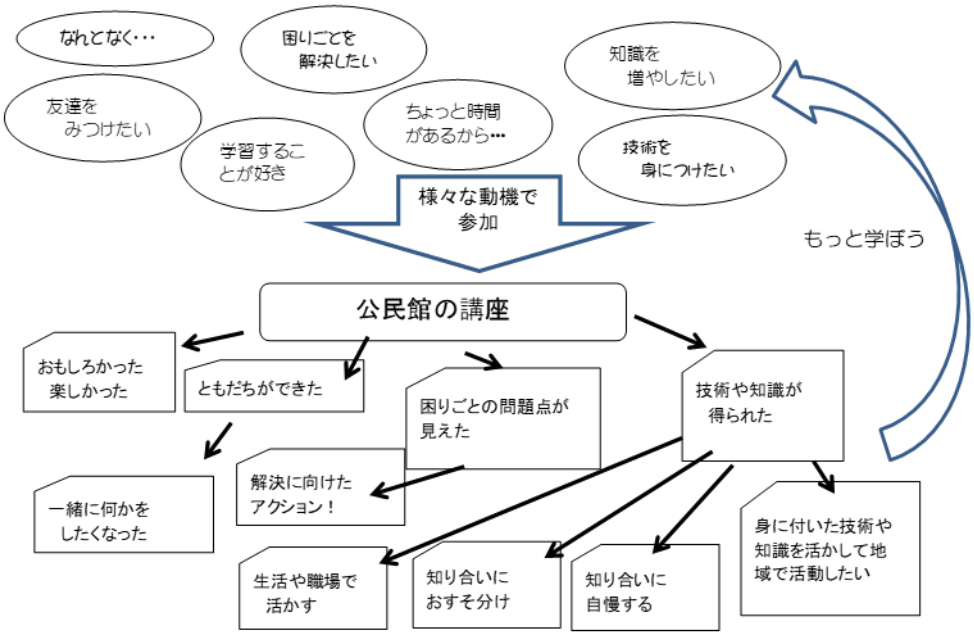
さらに、東日本大震災により、改めて「公民館は地域の茶の間」と言われた原点にあると考えました。

避難所生活にはストレスを増やす要因が多々あります。例えば狭いスペースで、周りが

見知らぬ人だらけだと不安で居心地も悪い。けれど、時々講座で出会う〇〇さんだったら、声を掛け食料を分け合えるかもしれません。いつもサークルでみんなに笑顔で接してくれる〇〇さんのペットなら、鳴き声や抜け毛があまり気にならないかもしれません。サークル連絡会などで人間関係調整に慣れていたら、避難所での役割分担やトラブルの解決がしやすいでしょう。公民館事業を通して、住民同士の親和度、相互受容度を高めることが、昔のように、いえ、昔以上に公民館の大きな責任となっているのではないでしょうか。

さて、そうはいっても、学習機会への期待や目的はひとそれぞれ違います。公民館の学習では図１のように、どのような動機で参加し、その結果どの方向に進んでも、あるいはどこかで留まってもo.k.です。講座が「まどいになごむひととき」となって「明日への力」(**＊注**)につながるだけでも良いではないですか。そこが、県全体を対象とした講座や民間教育産業の講座との大きな違いだと思います。ただ、どこで留まっても良いとはいうものの「できるようになった事、わかった事を人に教えたい。」「できればそれによって認められたい。」というのは誰にでもある欲求なので、そのための機会を用意し、活動の場につなぐ仕組みづくりの工夫が必要であることは忘れてはいけないと思います。年間事業、あるいは複数年の中で、バランスをとって様々な矢印に向かう講座を計画することが、専門的職員としての腕の見せ所でしょう。

図１



公民館参加動機と参加後の図　2013 秦野

それでは矢印のひとつ、仲間づくりや活動につながる学びについては、何をやるかよりもどうやるかという学習方法から話しを進めます。

「一緒に学ぶ人たちといると楽しい、このメンバーで何かをやりたい」と言う気持ちは、教える人対多数の参加者、と言う構図では生まれにくいので、自発的学習を促す仕組みがあるワークショップなどの参加型学習について考えてみましょう。

参加型学習とは一般的には、一斉講義形式のみの学習に対して「学習者が自ら考え、学習支援者とともに学習活動に参加して作っていく学習方法」と整理されています。特に、成人学習者の「気づき」「分かりなおし」につながる経験的な学習方法としても有効で、一緒に学ぶ他の学習者の意見や発想から「気づき」「相互に学びあい」「互いに学習をふりかえる」という学習過程を大切にし「学習への参加とともに社会への参加を可能にする」ということを重要な視点としているため、学びの場での活動体験と、その中での葛藤や小さな失敗を学びあいで乗り越えていくプロセスの体験を要素としています。それにより、地域で活動する力＝人間関係作りの力・関係調整の力・問題解決の力 etc.が培われることを目指す方法です。

例えば表１のように、複数回の中に体験や実践とふり返りの循環を入れるプログラムがあります。

表１　子育て支援活動を目指す人たちのための実践プログラム例

第1回	グループワークのすすめかた	話し合いで物事を決める手順（講義演習）
第2回	子どものためにできることを考えよう	論理的思考で考える手順（講義演習）
第3回	子どものためにできることを考えよう	子育て・子育ち支援に必要な技術や心（講義演習）
第4回	今なぜ子育て支援？	現代の子育て事情（講義）
第5回	ボランティア養成講座プログラムづくり1	プログラムの企画から運営までについて（講義）
第6回	ボランティア養成講座プログラムづくり2	子育て支援者、子ども支援に分かれて作成（演習）
第7回	ボランティア養成講座プログラムづくり3	同上
第8回	模擬プログラムの発表	発表と リ・プログラム（演習）
第9回	演習を生かして、事業を作ろう	省察と実践サイクルについて（講義・話し合い）
第10回	事業準備	事業企画と役割分担、評価の作成（講義演習）
第11回	事業準備	役割に基づく相互学習、伝達講習（実習）
第12回	事業準備	役割に基づく準備（実習）
第13回	事業実施	乳幼児～小学生向けに3つのコーナーで実践
第14回	事業反省をこれからに生かすための整理	省察作業（グループ演習・全体演習）

こうした講座を進める中では職員がハラハラしたり、悩んだりすることがあるのも事実です。特に、今までの思考の枠組みや価値観を学習者自身が変化させるプロセスでは、拒否とみられるような反応があります。「いつになったら『勉強』が始まるんだ」と怒ったり「もっと知識伝授中心の講座にしてほしい」と言う。グループ活動に加わらない、攻撃的な意見を言い出す、休憩時間にも他の人と交流しない…こんな反応に出会ったら、職員はがっかりし失敗感しか残らないかもしれません。でも、それは完全な拒否ではなく、次の段階への模索の時期である場合も多いのです。そのうちに、自分が見つけた新聞記事を持ってきたり、お互いの資料を交換したり、講座後に食事に行く、講義を聞くよりも話し合いに時間を使いたがるといった反応も出てきます。ですから、課題解決や活動につなぐための参加型講座は、ある程度の期間と性急に結果を求めないことが必要です。

参加型学習は一般的には「アイスブレーク→課題にそったアクティビティ→ふり返りの作業」の流れで組み立てられます。異論はあるかもしれませんが、私は必ずしもこのような形式だけでなく、冊子や広報紙の編集作業も参加型学習と言えますし、趣味・教養の講座でも、学習のプロセスに何らかの形で参加する機会を作る、学習者の相互交流、相互の学びあいを少しだけ作る仕組みを取り入れることから始めれば良いと思います。

そうはいっても、教養講座や趣味の講座を参加型で進める講師が見つからない、と言う声が聞こえそうなので、私が講座で実践している例からヒントになりそうなことを挙げてみます。

講師の話しから知識をある程度伝えたいという講座の場合には、図２のような記録紙を配布して、講義の後、隣の人と話し合い、共有し、質問をまとめ、講師に伝えるという方法がとれます。趣味の実習講座の場合には、机を向かい合せてグループ内で、参加の動機、期待と不安、名前を伝え合ったあとに実習を始めることで、作業の途中で交流が生まれ、相互学習につながりやすくなります。

図２

講義を聞く講座のための確認メモ

①今日のテーマで、あなたが一番知りたいことは…
②講義を聞いて、印象に残ったことは…
③あなたの期待や捉えと違ったことは…
④確認したいこと、質問したいことは…

さらにどの講座でも共通で使える方法をいくつか列挙すると

・講座の休憩時間に「今の満足」「今の不安」を付箋に無記名で書いて掲示し、お互いに読みあい、付箋でコメントする。講師もそれを読み、後半を修正する。

・参加動機は申し込み時に確認。申し込み時にできなければ、講座の始めに書いてもらい、集めて講師が目を通し、参加者に合った内容に微調整する。

・講座を始める前にお茶を出してみんなで飲む。（これが相互交流のきっかけになることも。）

これらは講師に確認をとったうえで、公民館職員がすぐにできることではないでしょうか。声のかけ方など多少工夫は必要ですが、やっているうちにコツをつかめます。公民館職員も学習者と共に学び、体験しながら力を付けて行くのですから。

互いに力を引き出しあう場面、関係が作られていくプロセスを学習者と一緒につくることが出来たときの喜び、初めて出逢ったひとたちが講座終了後に旧知の仲のようにロビーでにこやかに話している姿を見るときの嬉しさは格別です。ばらばらでいるよりも集まった方が大きな力になるのですから、地域の力が生まれてくるのはこんなことがスタート。これぞ公民館職員の醍醐味、と思えるのではないでしょうか。みなさんの講座でみなさんの地域に笑顔が増えますように。

（＊注：公民館の歌の歌詞の一部を引用しています）

参考文献（「おとなの学びを拓く」クラントン著　入江直子　豊田千代子　三輪建二訳：鳳書房 2002）